

【論 説】

ハイエクの自生的秩序と生物学的理解

川 村 哲 章

目 次

1. はじめに
2. 自生的秩序の生物学的な例
3. ハイエクの自生的秩序論から見たホッケ柱
4. 部分と全体、両方と外界との相互作用
5. 禁止のルールの含意
6. 無知の状態の恐怖の克服
7. 「目的論的説明は気が進まない」
8. ハイエクの理性

1. はじめに

ハイエクの自生的秩序については、理解・解釈するのが難しいと言われてきた。確かにハイエクの自生的秩序について、誤解も多いように思われる。

ハイエクの「自生的秩序」は、『科学による反革命』⁽¹⁾『自由の条件』⁽²⁾『法と立法と自由』⁽³⁾などおいて徐々に確立されたものとみることができる。そしてその思想史の中での位置づけや哲学的な系譜について説明されたきた。特に、カント主義なのか、ヒューム主義なのかは、研究者の間でよく議論されてきた。⁽⁴⁾

これについては、筆者は、抽象したルールについて論じているところ⁽⁵⁾は、カント主義的な要素が大きいと思われるが、そのルールの集合体として捉えられる自生的秩序が淘汰されることをのべるところは、ヒュームの的な要素が大きいと思われる。自生的秩序を形成する個体や個人のルールの段階での議論と秩序全体の淘汰される段階での議論は分けて考える方が考えやすいのではないだろうか。

もっともヒュームにも個人の抽象的なルールが形成されたていく段階にかかわるような認識⁽⁶⁾にかかわる議論があるのも確かである。また、カントの、ハイエクの抽象的なルールにかかわる議論は、超越論的な要素を含む。「超越論的」な要素は、経験を経て形成されるものであるので、進化や淘汰の過程を含むものとも考えることもできる。哲学の用語「超越論的」やアプリオリ（先天的）という言葉についてもっと踏み込んだ議論⁽⁷⁾も必要なかもしれない。経済学者が哲学の議論をする難しさもあるが、研究者の間で意見が分かれるのは、前述のようにハイエクの自生的秩序論のどの段階についての議論なのか、また研究者がカント哲学やヒューム哲学をどのように解釈しているのかについて整理された議論ないためだと思われる。

ハイエクは、自生的秩序を説明するのに、物理的な現象を例として引くこともある。そして、生物学的な説明、さらに人間社会の説明をする。生物学的説明と人間社会の説明に差を設けていない。筆者は、上述の哲学上の議論を整理して行うためにも、ハイエクの自生的秩序の理解のために、これまで行われてこなかった生物学的な知見からの理解を深めることを進めてみたい。

この論文では、1967年のハイエクの論文「行為ルールシステムの進化」⁽⁸⁾を中心に読み、その意味するところを明らかにしていく。この論文は、ハイエクが秩序について語った中では、比較的早い時期のものである。8つの節からなっているが、一つ一つの節の内容の理解自体、それほど容易ではないように思われる。人間の意識的なもの、熟慮の上のものではない過程を扱うので、よほど気を付けて読まないと誤解してしまう。また、それぞれの節を

つなげて理解できる場所もあれば、節のつながりがよくわからず、なぜここでこの内容が語られるのか、わからない場所もある。しかし、それだけに、ハイエクの秩序論の形成の過程として見るならば興味深いものとなる。ハイエクの秩序論は、これ以後も大きな分量をもって語られていくし、表に出た形でも出ない形でも論述の中心的なテーマとなっていく。したがって、秩序についての論述が早い段階でどのような関心から書かれているのかを読み解くことは、非常に重要である。これまでは、思想史の中で位置づけや、影響を受けている思想家の関連が語られることが多かった。学説史的なアプローチは重要であるが、思想のある部分を取り出して、その部分についての影響や関係を見てもやはり部分的な理解にとどまるのではないかと思われる。もう少しハイエク自身の関心、問題意識を明らかにし、そのうえで全体を読み、さらに他の思想家の影響、関係を考えることが必要と思われる。

「行為ルールシステムの進化」の最初の節で、ハイエクは、「ある集団の個々の成員（もしくはなんらかの秩序の要素）の活動を統御している行為ルールの様々なシステム」⁽⁹⁾と「これの結果としてのその集団全体に生じる行動の秩序もしくはパターン」との区別の重要性を明らかにすること⁽¹⁰⁾を目的としている。なぜこの区別が重要になるのか、この区別が秩序の形成に大きくかわることが語られていく。しかしこの2つの区別がなぜ重要であるのかは、はっきり語られていないように思われる。この論文では、これらについて明らかにしていこうと思う。

2. 自生的秩序の生物学的な例

ハイエクは、「行為ルールのシステムの進化」の3つ目の節で、「個体の行為ルールが全体的秩序を生み出す様を最も簡単に観察できる例は、この秩序が、動物やヒトの集団の行進や防衛や狩猟の際に生じる空間的パターンとして現れる場合である」⁽¹¹⁾と語る。秩序の説明をするのに、ハイエクが動物と人間を、また規則性を持っているものとして無生物のうごきまで区別せずに

考えているのは、特徴的なことである。

そこで、まずは、「行為ルールのシステムの進化」の順番どおり、秩序についての生物学的な側面からの説明に焦点をあてたい。生物学的な側面からの説明は、人間が形成する秩序の説明としては、確かにそのままでは限界があるが、ハイエクの秩序論は、意識的な熟慮によらないと言明されるもので、その点は、意識的な熟慮の可能性がない動物を例に考えることは、メリットがある。秩序論がかかわる思想史や政治学、経済学、法学の中で論じると人間の意識的な熟慮の上の思考とどうしてもかかわりが出てきてしまう。もちろん、そのような議論は重要だが、そこへ行く前の議論として生物学的な説明から秩序を捉えておくことは、誤解をしないための方策として有効であり、また必要なことであると思われる。

ここでは、自生的秩序の生物学的な例⁽¹²⁾の一つとして、ホッケ柱⁽¹³⁾と呼ばれるものを提示したい。そのあと、ハイエクの秩序に関する言明と合わせてハイエクの言う「一つの中央の命令や、個体側のその特定の瞬間に全体にとって必要なことへの『洞察』」⁽¹⁴⁾によらない秩序のイメージを作りたい。前掲の注の研究論文およびテレビ放送から得られた知見を簡単にまとめると以下のとおりである。

現象

毎年、春先の北海道の海で見られる現象である。海面に直径3メートルほどの渦ができあがっている。見ると大量発生したプランクトンがその渦の中に引き込まれているのが観察される。渦の水流の強さは、調査のために渦の中心に入ったダイバーが回るほどのものである。

この渦を海中から見ると、数万匹のホッケの大群がいて、10～20メートルほどの柱のようなものを形成し、海面近くから海底に向かって群れをなしている。プランクトンを捕食するための行動である。

（１）この現象の説明

この現象が起きるためには、一つの条件はプランクトンが大量発生していることである。

ホッケは、産卵をひかえ、栄養分を補充するために餌を求めて海面近くまで上昇する。ホッケの体の特徴として、体内に鰾（浮き袋）がない。そのため上昇するためには尾びれを激しく動かすのであるが、これにより下方への水流を作り出す。

（２）再現するためのシミュレーション⁽¹⁵⁾

テレビ放送の番組内では、個体の動きからコンピュータを使って、ホッケ柱をシミュレーションしていた。外的な条件としては、上述のプランクトンが大量発生していることである。

個体の動きとしてまずプログラムしていたのは、①海面近くのプランクトンを食べる、②群れをつくる、である。さらに、群れをつくる魚一般の特徴として、①同じ方向に動く②群れから離れない③中心に向かう、である。

これらをプログラミングした結果、コンピュータ上で、海面近くに群れができたが、海底に向けて伸びるホッケ柱はできなかった。現実には、海面近くにいるホッケは、空から海鳥によって捕食されてしまうことが紹介されていた。これを避けようとするならば、海面近くで群れをつくることはないだろう。

前述のホッケの体の特徴を踏まえ、さらにプログラミングする。ホッケは、鰾（浮き袋）を持たないので尾びれを激しく動かさなければ上昇できないのであった。また、そのために体力を消耗すると考えられるので、上方に向かって泳いで下方への流れをつくり、餌を食べたあとは、休む、鰾（浮き袋）がないので沈んでいく、また上方に向かって泳いでいき下方への流れをつくる、そして、餌を食べた後は休む、鰾（浮き袋）がないので沈んでいく、……これを繰り返すという動きを加えた。その結果、ホッケ柱をコンピュータ上にシミュレーションすることができた。

これらから考えられることは、このホッケ柱に参加したホッケは、上から

下への水流を作り出して、それが餌のプランクトンを引き込み、海面近くまで行かなくとも餌を得ることができるので、空から海鳥に狙われることなく安全に、また、上昇と休むことを繰り返すことで継続的に餌を獲得できているということであった。

コンピュータのシミュレーションのためのプログラミングのための情報について書いたが、これについて実際ホッケがどのような行動パターンに従っているのかは、推測するほかない。しかし、ここで重要なのは、いくつかの行動パターンを組み合わせることで、ホッケ柱のような全体的秩序が形成された、中央の指令によらずに全体的秩序が形成されたかに見えたということであり、おそらくホッケもそのような仕方でホッケ柱を形成していると推測されるということである。

コンピュータ上のシミュレーションと現実に行っていることの関係については、再現しているように見える、というだけで現実もそうとも言えるのか否かなど、考えるべきことはまだありそうであるが、ここではそのように見えたということを意味のあることとして捉えたい。

3. ハイエクの自生的秩序論から見たホッケ柱

ハイエクは、「行為ルールシステムの進化」において、自生的秩序について説明しているが、その2節において集団による行動の秩序と個体の行為ルールとを区別することの必要性を説くために9つの文章⁽¹⁶⁾をあげている。それは自生的秩序の説明の核心にあたる部分だろうと思われる。しかしながら、抽象的な表現が多く、イメージをもって理解するのは困難だと思われる。ここでは、その理解のために前節で上げたホッケ柱についてハイエクの9つの文章一つ一つを挙げながらそれに即した解釈をし、自生的秩序の理解につなげたい。

1 行動からなる秩序のそれぞれは、それをもたらしている個体の行為

ルールについての知識がなくても、観察し記述されうる。そして、個体の行為ルールの異なった組み合わせから行動についての同一の全体的秩序が生み出されうることは、少なくとも十分想像できる。

ホッケ柱は、ホッケの個体の行為ルールについての知識がなくとも観察できたし記述できた。個体の行為ルールが組み合わさって形成されたということもできる。

2 個体の行為ルールの同じ組み合わせは、ある状況下では一定の行動の秩序をもたらす、異なった外的状況下ではもたらさないかもしれない。

ホッケ柱は、プランクトンの大量発生という外的状況下で起こる現象である。これがなければホッケの行動は違ったものになっている。

3 集団の維持のために重要なのは、切り離された行動の規則性それ自体ではなく、結果として生じる行動の全体的秩序である。そして、ある種の全体的秩序は、それをもたらした個体の行為ルールがいかなるものであるかにかかわらず、同じようにその集団の成員の生存に貢献するであろう。

ホッケの行動の規則性は、規則性それ自体のものではないと言えよう。また全体的秩序につながるものであった。それ以外の行為ルールにしたがった行動は見られなかった。

4 異なった個体の行為ルール間の進化論的選択は、それが生み出す秩序の生存力をとおして機能する。どんな所与の個体の行為ルールも、ある一組のルールの一部としてもしくはある組み合わせの外的状況の下では有益となり、別の一組のルールの一部としてもしくは別の組み合わせの外的状況の下では有害となりうる。

プランクトンが大量発生しているという外的状況で、ホッケ柱は秩序として大きな生存力を生み出している。外的状況についていえば、極端ではあるが、ホッケを捕食するより大きな魚などが現れた場合を考えると、ホッケ柱

がそのまま維持されたならば文字どおり恰好の餌食になってしまうだろう。このような外的状況の下でホッケ柱を維持することは有害である。

5 行動の全体的秩序は、適切な状況下で、一定のルールに制御されている多くの個体の行動が合わさった産物として生じるのではあるが、全体的秩序を生み出すことは、個体の行動の意識的な狙いでもない。なぜなら、個体は全体的秩序についての知をなんら持ち合わせていないからである。したがって、個体の行動を導くことになるのは、全体的秩序を維持または回復するためにそのときどきになにが必要とされるかの自覚ではなく、抽象的なルールである。

ホッケ柱は、個々の個体が行為ルールにしたがうことによって生み出されるのであるが、全体的秩序を生み出すことは、個体の行動の意識的な狙いではない。当然ながら、ホッケの個体が全体的秩序についての知を持ち合わせていないことは確実と思われるし、全体を指揮するほどの知性を持ったホッケを考えることもできない。個々のホッケが、抽象的なルールにしたがっているだけであろう。

テレビ放送によれば、ホッケ柱はそもそも個々のホッケの集結する力が強いものではない。ホッケ柱を撮影しようと船で近寄ってカメラを渦の中心に入れたところ、ホッケは、バラバラの動きをして、ホッケ柱は簡単になくなってしまった。意識的な狙いというものは感じられなかった。

しかし、しばらくすると別の場所で渦が発生していた。条件がそろえば自然に発生するように見えた。

6 具体的な個体の行為は、常に、空腹のような内的衝動と、その個体に作用する個別の外的事象（その集団の他の成員の行動を含む）と、このような限定された場面に適用のあるルールとが、合わさった結果である。そして、ある集団の異なる個々の成員がある瞬間に従って行動するであろうルールはそれぞれ異なったものでありうる。というのは、それらに作用するさま

ざまな欲望や外的状況が異なったものでありうる。というのは、それらに作用するさまざまな欲望や外的状況が異なったルールを適用可能とするし、あるいは、年齢、性別、身分、各個体とその瞬間に見出す立場、の違いによって、異なった個体には異なったルールが妥当するからである。

ホッケ柱においては、空腹や仲間と群れをつくろうとする衝動、プランクトンの大量発生という外的事象などがこれにあたるだろう。ここの成員がある瞬間にしたがって行動するであろう行動ルールが異なったものになるのは、ホッケの場合、捕食するために上昇し、疲れたら休んで下降してくるということだろう。個体の状況によって上昇するものと、休んで下降する個体が同時に存在する。

7 行為ルールは決してそれ自体では行動の十分な原因にはならず、特定の種類の行動へと向かう衝動はつねに具体的な外的刺激か内的欲望か（そして通常は両者の結合）から生じるのであり、したがって行為ルールはつねに他の原因によって誘発された行動の制約としてのみ作用する、ということをもいつも覚えておくことが重要である。

ホッケ柱の場合、産卵をひかえ、養分を取ることがこの行動を引き起こす衝動となっていると考えられる。そして、上昇するのに疲れたら休み、沈んでいくという行動ルールである。

8 行動のシステムの秩序性は一般に、異なる諸個体の行動の結果が、当初の刺激を取りのぞいたりそれまでは行動の原因であった欲望を無効化したりした結果、個体の行動が調和させられたり相互に調整されたりする、という事実のなかにあらわれる。

ホッケ柱の場合、参加したホッケは、形成された渦によりプランクトンが海中までひきこまれるので、危険な海面近くに行くことなく、産卵に必要な養分を安全に、そして、おそらくはプランクトンを大量に捕食することができるのではないだろうか。渦に引き込まれるプランクトンがある限り、また

多くのホッケの空腹が満たされるまで、ホッケ柱は存続するのではないだろうか。

9 全体の秩序性とその個々の部分の規則性との違いは、いかなる特定の要素の行動もまったく規則性を示さなくともある全体が秩序的でありうる、という事実によってもまた示される。たとえばある権威が、具体的な個々の行動のすべてを命令するとともに、ある任意の瞬間になんらかの行動を遂行しなければならない個体を無作為に、たとえばくじで選ぶことにより全体の秩序がもたらされているとすれば、これがあてはまるかもしれない。さまざま役割がだれかによってつねに果たされているという意味において、このような集団にはある認識可能な秩序が存在するとはいえる。しかし（あるいは命令している権威を除いた）個体の諸行動を導くいかなるルールも定式化されえない。そこでどの個体が採る行動も、なんらかのその属性や（組織者の命令を除く）それに作用している状況、からルールによって引き出されるものではない。

この言明は、命令により、要素の行動の規則性がなくても全体が秩序的であることを述べて、行動の規則性と全体の秩序の区別を説明している。ホッケ柱には、ほとんど関係がない。

中央からの命令によらずに、秩序をもつもののイメージとしてはこれで十分でないかと思う。ハイエクは、これのあと、上述したような動物や昆虫の社会の持つ秩序にふれる。さらに、ヒトの素朴な社会について、自らが適切な行動とみなすものについて述べることができるであろう⁽¹⁷⁾という。ルールとして明示化することはできないにしても、「血族関係と通婚、または相続関係に関するルール」を遵守する。それから結果する全体の秩序について全く理解していない。⁽¹⁸⁾しかし、その個体がこのように活動するのは、そうしない個体群にとって代わってきたから⁽¹⁹⁾、と述べる。

4. 部分と全体、両方と外界との相互作用

4つ目の節において、ハイエクは、全体的秩序は、部分（行為ルール）の相互作用と、部分（行為ルール）と全体（秩序）両方と外界（外的状況）との相互作用、によって初めて完全に説明される⁽²⁰⁾、と述べる。さらに、

「環境の変化は、全体の存続のために、その集団の秩序の変化、したがって個体のルールの変化を要求するかもしれない。そしてまた、個体の行為ルールとその結果として生じる秩序との自生的な変化は、そのような変化がなければ集団を絶滅に導いたかもしれない状況下で、その集団の存続を可能にするかもしれないのである。」⁽²¹⁾（傍点筆者）

上のように述べて、秩序の淘汰の過程は、全体としての秩序について働くこと⁽²²⁾を強調する。論文「行為ルールのシステムの進化」の2つ目の節においてあげられていた9つの項目のうちでは3番目にあげられていたことにかかわる。「集団の維持のために重要なのは、切り離された個体の行動の規則性それ自体ではなく、結果として生じる行動の全体的秩序である」⁽²³⁾とあった。行為の規則性から全体的秩序が形成され、そこに淘汰の過程、外的状況とつまり全体としてのその集団の効率を高めるものであればその秩序は維持、回復される。ここで強調されるのは、個体の行動の規則性と結果として生じる行動の全体的秩序との区別である。9つの項目の4番目「どんな所与の個体の行為ルールも、ある一組のルールの一部としてもしくはある組み合わせの外的状況の下では有害となり、別の一組のルールの一部としてもしくは別の組み合わせの外的状況の下では有害となりうる」⁽²⁴⁾とある。それに関連して、ある一つのルールが変化することによって、それまで有害であった活動や身体の変化が有益なものになりうる例として、この論文および『法と立法と自由』において言語の最初の発生の例⁽²⁵⁾を挙げている。これは、全体的秩序として言語を使用する集団の方がその集団の効率を高め維持するのであれば、それまで有害なものであったかどうかは定かではないが、周り

に比べて言語を発するのに適した言語器官をもつものが有利になる。このように個体の行動の規則性と結果として生じる行動の全体的秩序は、外的状況によって有害だったり、有益だったりするので、区別されるべきとされる。

この区別の重要性が強調されるのは、筆者には、さらに秩序が存在するという主張そのものにかかわるからだと思われる。個体の行動の規則性と結果として生じる行動の全体的秩序の区別があいまいになると全体的秩序の存在自体があいまいになる。ホッケ柱の説明において、個体は、全体的秩序についての知をなんらもちあわせていなかった。個体として規則性のある行動をして、その結果全体にとって有利になる状態（ホッケ柱）が形成されたのであった。人間社会においても、環境の変化に応じて淘汰の過程を経て維持、回復していく全体的秩序が存在するならば、個体の行動の規則性とは別のものでなければならない。

それでは、秩序が存在するとはどういうことか。問題が基本的なところに戻ってしまったようだが、「行為ルールシステムの進化」の前半部分は、個体の行動の規則性と全体的秩序の区別の必要性を述べ、動物や昆虫の社会の秩序を述べることで、個体の行動の規則性とは別の全体的秩序が存在することを主張していたとみることもできる。

それでは、秩序が存在するなら、それはどういうものなのか、これに答えるのが「行為ルールシステムの進化」の後半部分である。

5. 禁止のルールの含意

秩序が存在するなら、どういうものなのか。これについて考えるために、「行為ルールシステムの進化」の8つ目、最後に節で言及されていることについてふれたい。ここでハイエクは、最終的にルールが基本的に禁止的ルール⁽²⁶⁾であることを主張しているが、これに至る過程が、全体的秩序がどういうものであるかの説明につながっているように思われる。

ハイエクは、ここで生得的（遺伝的に伝達された）ルールよりもすり少な

い厳密さで遵守される学習的（文化的に伝達された）ルールが守られるには、絶え間ない外からの圧力が必要で、それが効果的に維持されていなければならないとする。⁽²⁷⁾ そしてそれが基本的に禁止的ルールになっていく過程を次のように説明する。

「世界の規則性についての、すなわち、環境における出来事の既知で予測できる部分と未知で予測できない部分との相違についての不完全な知識は、その帰結が予測できるような行動にたいする選好と、予測できないような行動にたいする恐れとを必然的に生み出す。」⁽²⁸⁾（傍点筆者）

これらの選好は、アミニズム的に解釈された世界の人格化された主体の意志から課される懲罰に対する恐れと結びつく。そして、

「その環境の一部の規則性についての知識は、一定の帰結に対する自信に満ちた予想を生み出す行為に対する選好と、なにか不慣れなことをすることへの嫌悪と実際に行われたきの恐れをうみだす。」⁽²⁹⁾（傍点筆者）さらに、これらは、

「客観的世界にルールが存在するという知識と、行動する際に広く従われているルールからの逸脱が気乗りしないこと」⁽³⁰⁾（傍点筆者）と、

「さまざまな出来事がルールに従っているという信念と、人は行為する際にルールを遵守せ『ねばならない』という感覚」⁽³¹⁾（傍点筆者）の間にある種の結合を生み出す。

そして、上にあげた言明から以下のような恐れが生じる。

「それを遵守しなければ私は、受けいれられず、その結果として、したいことも生命維持のためにせねばならないこともほとんど何もできなくなるとともに、それらのルールに従わないと、もっとも恐るべき出来事の引き金を引いてしまい、その結果右も左も分からない世界に入り込んでしまうかもしれない。」⁽³²⁾

ハイエクによれば、良心の呵責も、「こうして既知の進路を外れて未知の世界に入り込んでしまったことで自らをさらしてしまっているさまざまな危険、にたいする恐怖のこと」⁽³³⁾である。

そして、部分的にしか理解していない世界で、「成功裏に生存しかつ自らの目的をなしどけるためには、自らを危険にさらすことを防ぐ一定の禁止的ルールに従うことが、この世界がそれに従って機能しているルールを理解することと同じくらい重要」⁽³⁴⁾であると説く。さらに、『『汝なすなかれ』型のルールは結局、なにが存在するかについての情報を与えてくれるルールとそれほど大きく異なったものではないのかもしれない』と述べ、これに注をつけて、これの意味するところは、記述的または説明的なルールは、「規範的ルールシステムの枠組みの中でのみ有意味でありうる、ということの可能性である」⁽³⁵⁾と説明している。規範的ルールシステムの枠組みの中で、記述的または説明的なルールを考えているということは大きな意味を持つと思われる。

これまでの説明でハイエクは、規範的なルールを主に、予測できない行動にたいする恐れ、なにか不慣れなことをすることへの嫌悪とそれが実際に行われたときの恐れ、行動する際に広く従われているルールからの逸脱が気乗りしないことなどから説明してきた。未知で予測できないことに対する恐れは根本的なものとして捉えられている。

ハイエクは、『自由の条件』や『法と立法と自由』においては、「自生的秩序」という言葉を全面に押し出して、それを「無知への適応」に関連付けて説明する。ここで詳しく見てきた「行為ルールシステムの進化」という論文は、その前段階になるわけだが、ここでの考察は、「無知への適応」は、より深くは、「無知であることへの恐怖への対応」であることが明らかになった。ハイエクのこの「無知であることへの恐怖」は、ハイエクの秩序論の根本的なものとして捉えておく必要がある。

部分と全体、両方と外界との相互作用について述べたところで、筆者はハイエクの「環境の変化は、全体の存続のために、その集団の秩序の変化、したがって個体のルールの変化を要求するかもしれない。そしてまた、個体の行為ルールとその結果として生じる秩序との自生的な変化は、そのような変化がなければ集団を絶滅に導いたかもしれない状況下で、その集団の存続を

可能にするかもしれないのである」⁽³⁶⁾（傍点筆者）という言葉を引きいた。

ここで、「自生的（spontaneous）な変化」という言葉が使われていることに注目したい。のちにハイエクの思想を語るうえで代表的な言葉として語られる「自生的秩序（spontaneous order）」につうじるものだろう。ハイエクの「自生的秩序」は、「自生的に変化する秩序」の意味合いが大きいかもしれない。人間がいつまでも無知であるのは、その中で暮らしている環境が変化するためである。この環境という外的状況の変化は、秩序論の中で大前提になっていると思われる。環境の変化を人間は、とらえきることができないので、無知の状態となる。無知の状態は、上述のように恐怖をもたらすので、それに対応するために規範的なルールの枠組みをベースにして、記述的または説明的なルールが形成され、それらの集合体として全体的秩序ができ、それに淘汰の過程が働いていく、という捉え方ができる。

6. 無知の状態の恐怖の克服

ハイエクは、「行為ルールシステムの進化」の4つ目の節において、全体的な秩序が上述してきたような仕方で存在していること、そしてそれが高度に複雑なものでありうること、そしてその高度なものの解明に向けてなされるべき社会理論の任務について言及している。⁽³⁷⁾ そこでは、社会理論に必要とされる概念的構成について語り、経済学と言語学の理論は、個体の行動の規則性から結果として生じる秩序の特質を再構成することがその任務だと語る⁽³⁸⁾。

ハイエクは、著作において社会理論の性格について語る場合が多いが、それらも「無知の状態の恐怖」からある程度説明されるのではないだろうか。無知の状態にある人間に、環境における既知で予測できる部分、一定の帰結に対する自信に満ちた予想を生み出す行為に対する選好を生み出すことに貢献し、記述的なルール、説明的なルールとして「無知の状態の恐怖」を克服しようとする営みである。

さらに、「行為ルールシステムの進化」の5つ目の節では、単中心的秩序と多中心的秩序について論じている。これについても、なぜこれがここで語られねばならないのかという点、「無知の状態の恐怖」を克服するために、社会に分散している知識をより効率的に利用できる秩序についての考察とすればよく理解できる。

また、「行為ルールシステムの進化」の6つ目の節では、再び社会科学の方法論について語り、「推測的歴史」⁽³⁹⁾について言及している。

7. 「目的論的説明は気が進まない」⁽⁴⁰⁾

ハイエクは、「ある秩序をもつ構造が存在するのは、その要素が秩序維持を確実にするために必要なことを行うからであるという意味で、因果関係を逆転させることを含意する」⁽⁴¹⁾と述べる。進化論的理解⁽⁴²⁾からすれば、要素が秩序維持を確実にするために必要なことを行うから秩序が存在するという言明は、因果関係の逆転である。さらに、進化論的な認識を示したうえで、この認識を含意するかぎりにおいて、「目的論的」説明は妥当なもの⁽⁴³⁾としている。

しかしながら、その直後、「目的論的なものとして記述することにわれわれの気が進まないのは、これらの行動の結果として形成される秩序が、行動する個体の動機や『目的の一部』では全くないためである」⁽⁴⁴⁾と述べてもいる。ハイエクの自生的秩序論が理解しにくくなるのは、秩序が存在することについて理解しようとする者が無意識、無批判的に目的論的説明を前提にしているからであろう。進化論的な含意を十分理解して読まなければならないし、生物学的な説明で得られた理解を生かさなければならない。

8. ハイエクの理性

最後に「行為ルールシステムの進化」の中の一つの論点が、この後の

ハイエク思想の重要な端緒となっていることを強調したい。ハイエクが自身で述べているように、いわゆる設計主義的合理主義との対決の中で自身の思想の進化論的合理主義が明確になってきた。ハイエクは、最大限の理性の有効な活用として、意識的理性の力の限界と自分では気付かない諸過程から得られる助力への洞察を挙げる。そしてこれが、設計主義的合理主義には欠けている⁽⁴⁵⁾と述べる。これは、両者を分ける大きな違いである。

この洞察は、「行為ルールシステムの進化」の中で語られた行為ルールと全体的秩序の双方の区別をするなかで得られたものである。区別するということは、全体的秩序が存在するということを明確にする。動物が形成する全体的秩序の存在は、熟慮の上の秩序ではないものが存在することを示すのに大きな役割を果たすと思われる。

[注]

- (1) Hayek, F. A., *"The Counter-Revolution of Science : Studies on the abuse of reason"*, Glencoe (The Free Press) 1952 [佐藤茂行訳『科学による反革命』木鐸社、1979年]
- (2) Hayek, F. A., *"The Constitution of Liberty"*, Routledge & Kegan Paul (London), 1960 [気賀健三 / 古賀勝次郎訳 ハイエク全集第Ⅰ期第5巻『自由の条件』「自由の価値」(1986年)、同第6巻「自由と法」(1987年)、同第7巻「福祉国家における自由」(1987年) 春秋社]
- (3) Hayek, F. A., *"Low, Legislation and Liberty"*, volume 1: Rules and Order (1973); volume 2: The Mirage of Social Justice (1976); volume 3: The Political Order of a Free People (1979), Routledge & Kegan Paul (London and Henry) [矢島鈞二 / 水吉俊彦訳 ハイエク全集第Ⅰ期第8巻『法と立法と自由——「ルールと秩序」』(1987年)、篠塚慎吾訳 同第9巻「社会正義の幻想」(1987年)、渡辺茂訳 同第10巻「自由人の政治的秩序」(1988年) 春秋社]
- (4) 山崎弘之『ハイエク・自生的秩序の研究——経済と哲学の接点』成文堂、2007年
- (5) Hayek, F. A., 'The Primacy of the Abstract', *"New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas"*, Routledge and Kegan Paul, 1978 [吉岡佳子訳「抽象の第一義性——精神活動とヒエラルキー」(池田義昭監訳『還元主義を越えて』、工作舎、1984年、第10章)]

- (6) Hume, David, “*A Treatise of Human Nature*”, ed.by L.A. Selby-Bigge/P.H. Nidditch, Oxford, 1978, Book I, Part 1, Sect. 7, p.23〔木曾好能訳『人間本性論』、法政大学出版局、1995年、第一巻第一部第七節38ページ〕「例えば、白い大理石の球が提示されるときわれわれが受け取るのは、ただ一定の形に配された白色の印象のみであり、われわれは色を形から分離することも区別することもできない。しかしそのち、黒い大理石の球と白い大理石の立方体とを観察し、これらを先の対象と比較することによって、先には完全に不可分に見えたまたま事実完全不可分である単純なもの（白い球形のもの）のうちに、二つの別個な類似性（球形と白さ）を見出すのである。この種の訓練をもう少し続けると、やがてわれわれは、形を色から『理性的区別』によって区別し始める。つまりわれわれは、形と色とを、それらが実際に同じものであり区別できないので、いっしょに考えるのであるが、しかし形と白のなす全体を、それらの全体がどういう類似性を受け入れるかに応じて、異なる相（aspect）において眺めるのである。われわれは、白い大理石の球の形だけを考えようとするとき、実際には形と色の両方を含む一つの観念をいただくのであるが、暗にその球と黒い大理石との類似性に、目を移しているのである。また、同様に、その球の色だけを考えようとするとき、われわれはその球と白い大理石の立方体との類似性に目を移しているのである。また、同様に、その球の色だけを考えようとするとき、われわれはその球と白い大理石の立方体との類似性に、目を向けているのである。このようにしてわれわれは、観念に一種の反省（reflexion）を添えているのであるが、この反省は習慣のせいではほとんどきづかれないのである。」
- (7) 日本の神学者で哲学者の北森嘉蔵は以下のように論じている。『神の痛みの神学』、講談社学術文庫、1986年、270ページ。「かく同一の言葉が二つの意味を包含することによって、かえって事実の具体的な理解に役立つということは、興味深いことであるが、かかる場合の著しい一つの例を哲学史上に求めるなら、カント哲学における *transzendental* という語である。周知のごとくこの語はカント哲学にあって根本的な役割を担うものであるが、従来この語はもっぱら『先験的』の意味に解せられてきた。しかし近時に至ってこの語は、厳密に『超越論的』の意に解せられねばならぬという主張がなされるに至った。この主張は正しい。しかし、じつはカントの認識論の真髄は *transzendental* という語に『先験的』と『超越論的』とをともに包含せしめるときはじめて能く把握されるといわれるのである。」
- (8) Hayek, F. A., ‘Notes on the Evolution of System of Rules of Conduct’ “*Studies in Philosophy, Politics, and Economics*”, University of Chicago Press (Chicago), 1967〔鳥津格監訳 登尾章訳「行為ルールシステムの進化」ハイエク全集第Ⅱ期第4巻『哲学論集』、春秋社、2010年〕

- (9) *Ibid.* p. 66 [同上書215ページ]
- (10) *Ibid.* [同上]
- (11) *Ibid.* p. 69 [同上書219ページ]
- (12) ハイエクが挙げている例は、「渡り中のハイイロガンの矢形の編隊や、バッファローの防衛的な輪や、複数の雌ライオンが獲物を仕留めるためにそれを雄の方に狩り立てるやり方は、複数の個体の行動を調和させているものが、各個体による全体的パターンの自覚ではなく目下の環境にどう対応するかというルールである、と考えられる単純な例である」。そのほかにミツバチやアリやシロアリ等の昆虫の社会に見られる分業にもとづいた抽象的かつより複雑な秩序からは、もっと学ぶべきものがある」(*Ibid.* p. 69 [同上書219ページ])。また、この昆虫の社会については、「もしそのルールが知られてさえいるならば比較的単純な個体の行為ルールによって説明できるであろうことは、ほぼ疑いない」(*Ibid.* p. 70 [同上書220ページ])と言う。アリの社会の分業については、ハイエクの時代には明らかにされていなかったが、現在ならば、巣の中においてアリの個体が発するフェロモン(匂い物質)によって変化するその濃度などから個体の役割が決定されることが知られている。
- (13) 北川貴士、中川隆、木村龍治、新野宏、木村伸吾 ‘*Vortex flow produced by schooling behavior of arabesque greenling *Pleurogrammus azonus**’ *Fisheries Science* 2011; 77 (2): 217-222「ホッケ柱：渦形成によるホッケ魚群の摂餌戦略」
 研究内容の紹介については https://www.jstage.jst.go.jp/article/suisan/78/4/78_h23-63/_pdf
 筆者がホッケ柱という現象を初めて知ったのは、以下のテレビ放送による。
 NHK2009年9月5日総合 「ワンダー×ワンダー 北の海 驚異のホッケ柱」。
 さらにNHK2022年1月9日総合 「NHK スペシャル 北の海 よみがえる絶景」も視聴した。
- (14) Hayek, F. A., ‘Notes on the Evolution of System of Rules of Conduct’ “*Studies in Philosophy, Politics, and Economics*”, University of Chicago Press (Chicago), 1967, p.70 [島津格監訳 登尾章訳「行為ルールシステムの進化」ハイエク全集第Ⅱ期第4巻『哲学論集』、春秋社、2010年、220ページ]
- (15) 番組内でシミュレーションを担当した専門家として吉田典正氏が登場していた。ホッケ柱ではないが、魚の群れのシミュレーションについては、彼の以下のような論文がある。
 佐藤大輔、吉田典正 Realistic Animation of Preying Act of Fish「魚の群れの動作を対象とした捕食-被食シーンのリアルな表現」画像電子学会年次大会予稿 06-33 p.71
- (16) Hayek, F. A., ‘Notes on the Evolution of System of Rules of Conduct’ “*Studies*

in Philosophy, Politics, and Economics", University of Chicago Press (Chicago), 1967, pp.68-69〔島津格監訳 登尾章訳「行為ルールシステムの進化」ハイエク全集第Ⅱ期第4巻『哲学論集』、春秋社、2010年、217-219ページ〕

- (17) *Ibid.* p. 70〔同上書220ページ〕
- (18) *Ibid.*〔同上〕
- (19) *Ibid.*〔同上〕
- (20) *Ibid.* p. 71〔同上書221ページ〕
- (21) *Ibid.*〔同上〕
- (22) *Ibid.*〔同上〕
- (23) *Ibid.* p. 68〔同上書217ページ〕
- (24) *Ibid.* p. 68〔同上書217-218ページ〕
- (25) Hayek, F. A., "*Low, Legislation and Liberty*", volume 3: The Political Order of a Free People (1979), Routledge & Kegan Paul (London and Henry), p.156およびその注22 (p.199)〔渡辺茂訳『法と立法と自由——「自由人の政治的秩序」』ハイエク全集第Ⅰ期第10巻「自由人の政治的秩序」(1988年) 216ページおよびその注22 (269ページ)〕
- (26) Hayek, F. A., 'Notes on the Evolution of System of Rules of Conduct' "*Studies in Philosophy, Politics, and Economics*", University of Chicago Press (Chicago), 1967, p.81〔島津格監訳 登尾章訳「行為ルールシステムの進化」ハイエク全集第Ⅱ期第4巻『哲学論集』、春秋社、2010年、234ページ〕
- (27) *Ibid.* p. 78〔同上書231ページ〕
- (28) *Ibid.* p. 79〔同上書232ページ〕
- (29) *Ibid.*〔同上〕
- (30) *Ibid.*〔同上〕
- (31) *Ibid.*〔同上〕
- (32) *Ibid.* p. 80〔同上書233ページ〕
- (33) *Ibid.*〔同上書234ページ〕
- (34) *Ibid.* p. 81〔同上書234ページ〕
- (35) *Ibid.*〔同上書238ページ〕
- (36) *Ibid.* p. 71〔同上書221ページ〕
- (37) *Ibid.* p. 72〔同上書222ページ〕
- (38) *Ibid.*〔同上書233ページ〕
- (39) *Ibid.* p. 75〔同上書227ページ〕
- (40) *Ibid.* p. 77〔同上書229ページ〕
- (41) *Ibid.*〔同上〕
- (42) 生物学における進化論の中で、自然選択の理論を説明する際、よく取り上げら

れる例であるが、キリンの首はなぜ長いのか。この説明としては、キリンに似た首が長くなる前の種を想定し、突然変異により、種の中で他のものより少し首の長い個体が生まれ、そのことが頭上の木の葉を食べるのに有利に働く。それが、子孫を増やす機会に恵まれることとなり、その特徴を子に伝えていくが、子孫にまた突然変異により他のものよりさらに首が長い個体が生まれ、それがまた頭上の高いところにある木の葉を食べるのに有利になる。これを長い時間にわたって繰り返し、元の種と交配ができなくなるほどに分離したとき、新しい種とされる。

この際、頭上の木の葉を「食べたい、食べたい」としているうちに首が長くなり、それが子や、さらには子孫に伝えられていったという獲得形質の遺伝が否定されることは理解される。

しかしながら、キリンの首はなぜ長いのかという問いに対する答えとして、頭上の木の葉を食べるため」は、現在のあるキリンの個体を見て、長い首を伸ばして頭上の木の葉を食べているのを見たならば、あながち間違いとは言えない。

キリンの首はなぜ長くなったのかという問いならば前述の説明になるだろうし、端的に答えるならば、「突然変異により世代を経て徐々に長くなった首は、頭上の木の葉を食べるのに、結果的に役に立っている」ということになろう。

- (43) Hayek, F. A., 'Notes on the Evolution of System of Rules of Conduct' "*Studies in Philosophy, Politics, and Economics*", University of Chicago Press (Chicago), 1967, p.77 [島津格監訳 登尾章訳「行為ルールシステムの進化」ハイエク全集第Ⅱ期第4巻『哲学論集』、春秋社、2010年、229ページ]

- (44) *Ibid.* p. 77 [同上書229ページ]

ハイエクは、上の文章の後に、アダムスミスの言葉「人間は『意図の中にはまったくなくような目的を促進するように導かれる』」を引き、さらに「それはちょうど、自らのなわばりを守る動物が、そのことが種の個体数の調整に貢献していることを全く知らないのと同じである」と述べる。ここでまた生物の例が引き合いにだされる。同じように、一匹のホッケは、ホッケ柱を形成することを意識してはいない。

- (45) Hayek, F. A., "*Low, Legislation and Liberty*", volume 1: Rules and Order (1973); Routledge & Kegan Paul (London and Henry), p.29 [矢島鈞二／水吉俊彦訳 ハイエク全集第Ⅰ期第8巻『法と立法と自由——「ルールと秩序」』（1987年）、春秋社、41ページ]